

設 計

井 口 昌 平

この語は、英語の“design”の訳語として工業の世界から生まれたのであろう。もうひとつの訳語として「デザイン」がつくられて、両方とも現在生きているが、それらの間にはニュアンス（ほのかな相異）があって、その相異は次第に大きくなりつつあるように見える。

さて、「設計」とは何か、という問題を出せばその道の人の中にはケンケンガクガク論じ立てる人がきっと少なくない、と思う。それほど「設計」という行為の概念は簡単に言いつくせるものではない。そこで、その道の人の学説は敬遠して、一般向けの辞書から意味を求めてみよう。The Concise Oxford Dictionary of Current English (C.O.D.) の design の項には、名詞として「頭の中で立てる計画 (plan)、攻撃の策略、故意 (偶然に対するものとして)、もくろみ、目的を達するように順応すること、下絵つまりデッサン；概観的な線画、美術や文学の作品の下書き・構想・構成・筋書き・それらを発展させる機能・新しい工夫」というような意味のあることを示している。それを見ても、“design”という語の背景の広さがわかる。

ところで、“design”は昔のフランス語に由来し、同じ源から現代のフランス語には le dessin, le dessein, la désignation という名詞ができていますが、いずれも「設計」という訳語を与えるわけにはゆかない。そればかりではなく、フランス語の中には「設計」とか“design”にびったりする語はない。その事情はドイツ語でも同じようなものだ。そのように見ると、“design”とか「設計」という語を使うのがむしろ特別なのだ、ということがわかってくる。そのことは、“engineering”と「工学」，“development”と「開発」，“management”と「管理」などについても言うことができるように思う。

このように例をあげれば、これらの語が英語文化圏での独特な発想法にもとづくものであることがわかる。それでは、フランスやドイツのようなヨーロッパ大陸の文化圏では、技術者の行う「設計」という行為をどのようなことばを表現するのか、という疑問が出

るに違いない。それに対して、「その大陸文化圏では概念を分析的に規定するのがならわしだ」という一般的な答を用意してよいと思う。したがって、設計という行為の中でも、計算を主体とする作業を取り出してフランス語では le calcul, ドイツ語では die Berechnung という語をそれにあてて用いる。それらの語はいずれも、数学での「計算」という語にそのままあてはまる。だめ押しめくが、英語の calculation という語からは「設計」を思いつくことはないと思う。

それでは、「だれその設計になる橋」などという場合に、ヨーロッパ大陸文化圏ではどんな言い方をするのか、という疑問が出るであろう。その場合には、「構想」という面が強調される。たとえば、フランス語では“la conception”という名詞と“concevoir”という動詞が用いられるであろう。

このように考えてくると、まず工業技術あるいは工学において用いられている専門用語が、必ずしも世界的に普遍的な概念を代表するものではないということが知られ、次に日本では英語文化の強い影響を受けていることが思い起こされ、さらに日本文化がそれらの専門用語の中に良く反映されているだろうか、ということを考えてくなる。ちょっと考えてみても、日本文化は、ねほりはほり、しつこく分析したものごとをとらえるよりも、大まかにとらえるのを好むように見える。それが証拠に「設計」とか「デザイン」とかが容易に日本語になっている。

しかし、日本文化と英語文化の間には、全体として見れば、大きなへだたりがあることはだれでも感じるからだから、「大まかにとらえる」という認識のあり方も、それら両文化の間では大きく違っているのである。

(筆者：正会員 工博 東京大学教授 生産技術研究所)

DDDDDD	EEEEEE	S	S	S	S	I	I	I	GGGGGG	N
D	E	S	S	S	S	I	I	I	G	N
D	E	S	S	S	S	I	I	I	G	N
DDDDDD	EEEEEE	S	S	S	S	I	I	I	GGGGG	N
D	E	S	S	S	S	I	I	I	G	N
D	E	S	S	S	S	I	I	I	G	N
DDDDDD	EEEEEE	S	S	S	S	I	I	I	GGGGGG	N